

**ツキヌキサコ** (新稱) *Bupleurum rotundifolium* L. 本年 5 月東京品川区五反田驛近くの路傍でたつた 1 本見出したもので、葉は卵形で基部が茎を抱きいわゆる穿生葉となる特異な形で花下の苞は大形、黄色で、一見トウダイグサを想わせる。歐洲原産であるが、北米に歸化して居る由で、我國に入つたものは現在の交通状態から見てアメリカ經由で渡來したものと考へる。浅井康宏氏が神奈川縣藤澤で採集した標本を見たから、更に他の地域からも發見される可能性がある。

**トゲムラサキ** (新稱) *Asperugo procumbens* L. 前記浅井氏の採集品中にムラサキ科の一品があり、花が小さく藍色で、果實は柄が短かく下向して着いている。花時の萼は不規則に 5 裂し花後伸長する性質があり裂片が缺刻狀の齒牙縁となり裂片の先が尖つている。この感じと全株剛毛を被る點とで和名をトゲムラサキとしておいた。一見 *Atriplex* 屬の苞に包まれた果實に似て居る。歐洲原産の一年草である。

以上は記録として我國に新しいものであるが、他に浅井康宏氏の藤澤の採集品中に次のものがあり「歸化植物」の著者久内清孝氏によつて解決された。*Coronilla scorpioides* Koch ツリシャクジャウ, *Sherardia arvensis* L. ハナヤヘムグラ, *Scandix Pecten-veneris* L. ナガミノセリモドキの 3 種でいずれも栽培の記録はあつたが今回藤澤市附近で野生の状態で見つかった。3 種とも歐洲原産の種類であるが、前に述べた様にアメリカ經由で渡來したものと考へられる。

### ○カマヤマシャウブの語源 (津山尙) Takasi TUYAMA : Etymology of specific epithet of *Iris Kamayama*.

カマヤマシャウブの名は岩崎常正が「琉球釜山より來るといふ」と書いて以來、琉球は朝鮮の誤とし、釜山の和讀みカマヤマに由來したものとされている。しかし小生の組立てたお話は別で、次のようである。

カマヤマシャウブでは栽培中のアヤメから變化して出現し、はじめに關東地方の農夫によつて纖維植物として擴まつた。捻れて固く、少し灰色を帯びた葉は一寸ガマに似ているのでガマアヤメと呼ばれた。この際ガマも同様に繩などに利用されることがこの連想を助けたに違ない。實際カマヤマシャウブの葉は若い時には立つていてコガマとそっくりであるし、コガマは關東地方に普通である。ガマアヤメは轉化してカマヤマになった。「現に武藏神代(ジンダイ)村仙川附近ではこれをカマヤと稱し、葉を打つて竹垣の結び繩などに用いている。」これが都會の花戸に知られるようになると纖維の利用よりはアヤメより一層美大な花の觀賞の方に注意が向けられる。これを單にカマヤマと言うのでは美しい花をつける植物としては説明不足で、もの足りず、商賣上にも差支える。また何とかアヤメやハナシャウブの類であると判るような名が欲しくなる。こう言う所に誰かがカマヤマシャウブの名を付けたのが一般の氣持に合つて擴まつた。その中に本草

學者の目にもとまるが、もうその頃には鄙びた農夫の連想などつづく昔に忘れられていて、カマヤマの意味は判らなくなっている。花戸に聞いて見ると琉球の釜山から來ましたと言う。これを書物に書くと言う順序。とかく學者は書齋的であり、花屋はいいかげんなことを言うのは今も昔も變らないらしいが、この邊が落ちではあるまいか。

オホバギボウシに對する山間の名のウルイは都會に來るとこれでは納得が行かずにウルイサウとなり、これが徳川時代の歳時記（例：俳諧季寄これこれ草）等に見え、やがて本草の書にもなるようになる。これもやはり同様な human psychology の所産であろうか。

カマヤマシャウブの株を惠與され、また仙川の現地に案内された佐々木一郎氏及び津村藥草園の方々に感謝します。

### ○ミヤコヤブソテツ 關東に現わる（倉田悟） Satoru KURATA : *Cyrtomium Yamamotoi* Tagawa from Mt. Mitsuishi, Prov. Kazusa.

千葉縣三石山（海拔 281 m）は清澄山の西北方に位し、頂上の三石觀音には日々參詣者の絶ゆる事なく、又植物採集地としても有名であり奥山春季氏も紹介の筆をとられている（本誌 21 卷 169 頁）。特に所産羊齒類については下總植物同志會の行方沼東氏が既に 15 年近くも調査を續行され、昨昭和 25 年には「三石山の羊齒植物」を發表され 88 種を數えられている。勿論其後の御研究により追加訂正する所あり、現在は 100 種を超えた目録を用意されている。

さて筆者は本夏、行方氏及び同じく同志會の島田、木内の二氏と共にこの三石山に羊齒を探り、或はオニヒカゲワラビの大群落に俠哉を叫び、或はイワヤシダの自生地にその健やかなる生育を喜び、多々獲る所あり、就中ミヤコヤブソテツ *Cyrtomium Yamamotoi* Tagawa in *Acta Phytotax. Geobot.* 7: 187 (1938) の自生に遭遇したのは一報の價值があろう。本羊齒は京都附近を type locality とするが關西でも稀産のもの如く兒玉、瀬戸、山中三氏の近畿地方シダ類目録（1950 年）には京都、三重、大阪各府縣下に一箇所宛の産地が登載されているのみである。其他の地方では中島一男氏が九州福岡産を報告されている。

三石山附近にはヤマヤブソテツの種々なる型が豊富に見られ、ミヤコヤブソテツは之等に混つて僅かに採集出来る。10 對前後の披針形の羽片が長く漸尖した姿は一見してそれと分るが、包膜の中央に濃色部の著しい點がやはり良い特徴である。ヤマヤブソテツの羽片巾狭きもの又ヤブソテツの羽片少きものには多少ミヤコヤブソテツに近似の型も見られるが、同一視すべきではないと思う。羽片基部の形狀についてはヤマヤブソテツ、ミヤコヤブソテツ共に變化多く、更に上部羽片又特に裸葉になると楔形が顯著となり、この點による區別は難しい。